

## 論文

# 保育者養成課程における専門性育成の課題

○西本佳代\*1 国広勝代\*2

キーワード：保育者、専門性、学生調査、アンケート

## 1 はじめに

近年、保育者の専門性育成に注目が集まっている<sup>注1</sup>。少子化、核家族化、女性の社会進出など、急速な社会変化を背景に、幼稚園、保育所における保育に対するニーズが多様化している。そうしたニーズを受け、保育者も多種多様な能力を身につけなければならなくなった。文部科学省(2002)は、「幼児を内面から理解し、総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携を推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、園長など管理職が発揮するリーダーシップ、人権に対する理解など」を幼稚園教諭の身につけるべき専門性として挙げている<sup>1)</sup>。

こうした社会的ニーズに対し、保育者養成校においても、保育者を目指す学生に専門性を身につけさせるための取り組みが進められている。保育者養成を行う短期大学を対象としたアンケート調査(目白大学短期大学部 2011)の結果からは、専門的知識と共に具体的な保育実践力の習得などが重視されている実態が明らかにされている<sup>2)</sup>。

保育者養成校における専門性育成は切実な課題である。だが、そうした専門性を育成するための取り組みは、十分に機能しているといえるのだろうか。山田(2009)は、「学生の教育効果は直接的な教育環境によるものばかりでなく、学生側の要因も少なからず影響している」(79頁)と指摘する<sup>3)</sup>。つまり、同じ教育を受けていても、それを受ける学生の素質によって、影響が左右されるということであるが、専門性を育成

するための取り組みについても同様のことが言えるだろう。すなわち、保育者養成校において専門性を育成するための取り組みが熱心に行われようとも、その内容を消化していない学生がいると考えられるのである。

では、どのようにすれば、より多くの学生に保育者としての専門性を身につけさせることができるのだろうか。本稿は、この課題に取り組む礎とするため、専門性を身につけている学生と身につけていない学生の違いについて検討する。

保育者養成課程における専門性の育成について、これまでも研究が蓄積されてきた。谷川(2010)は、幼稚園教育実習に伴う学生の専門職意識の変化について分析しており、実習の果たす役割を考察する上で有益である<sup>4)</sup>。また、奥山・山名(2010)は、保育者志望学生を対象としたアンケート調査をもとに、求められる保育者の専門性について考察しており、学生のニーズを知る上で重要な資料となっている<sup>5)</sup>。

しかしながら、これらの研究においては、学生間の差に十分な注意が払われていない。専門性の育成を目的とした同じ教育を受けても、その内容を十分に身につけられる学生と身につけられない学生が存在する。そうであるならば、それぞれの特徴を考慮し、各々に適した教育を行う必要がある。本稿では、より多くの保育者をめざす学生が専門性を身につけることができよう、彼らの特徴を分析したい。

## 2 分析の方法

本稿が分析に用いたデータは、2008年11月から2009年2月にかけて実施された学生調査(「大学生の学習経験・生活に関する調査」研究代表者：有本章)である。

\*1 香川大学 教育・学生支援機構

\*2 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

この学生調査は、中国、四国、関西地方に所在する 11 大学（私立大学 6 校、国立大学 4 校、公立大学 1 校）、4,363 名を対象に実施された。この中から、幼稚園教諭及び保育士養成課程を設けている私立 H 大学短期大学部の幼稚園教諭・保育士養成課程の学生を分析対象として抽出した。

私立 H 大学短期大学部幼稚園教諭・保育士養成課程は共学だが、そこに通うほとんどの学生は女性である。調査対象者 193 名中、男性は 12 名、女性は 181 名となっていた。また、学年については、1 年生 93 名、2 年生 100 名とほぼ同数であった。

### 3 分析結果

#### 3 - 1 専門分野に関する知識・技能の獲得状況

分析をはじめると、まずは、私立 H 大学短期大学部の幼稚園教諭・保育士養成課程に通う学生の専門性について確認したい。表 1 は、自分の専門分野に関する知識・技能の獲得状況を問い、得られた回答の結果である。ここからは、専門性が身についていると考える学生と身につけていないと考える学生がほぼ同数存在することがわかる。「とても身につけている」4.3%、「ある程度身につけている」44.9%というように、あわせて 49.2%の学生が専門分野に関する知識・技能が身につけていると考えている。その一方、「まったく身につけていない」4.3%、「あまり身につけていない」46.5%、あわせて 50.8%の学生が専門分野に関する知識・技能が身につけていないと考えている。

この結果を用いて、本稿では、保育者養成課程に通う学生を、専門性を身につけている【獲得群】と専門

性を身につけていない【未獲得群】に分けた。【獲得群】は、専門的知識・技能が「とても身につけている」もしくは「ある程度身につけている」と回答した学生である。一方、【未獲得群】は、専門的知識・技能が「まったく身につけていない」もしくは「あまり身につけていない」と回答した学生である。以下では、【獲得群】と【未獲得群】とに分け、その違いを検討したい。

#### 3 - 2 基本的属性との関係

【獲得群】と【未獲得群】との違いを明らかにするため、以下では【基本的属性】、【高校時代の日常生活】、【大学における日常生活】、【授業態度・意識】、【教員に対する評価】、【大学に対する評価】、【身につけた能力】という七つの点について検討する。まず、学生の基本的属性と専門的知識・技能の獲得状況との関係を検討したい。表 2 は、性別、学年、進路希望の有無と専門的知識・技能の獲得状況との関係を示したものである。

その結果、性別については大きな差がないことがわかる。男性は【獲得群】50.0%【未獲得群】50.0%、女性は【獲得群】49.1%【未獲得群】50.9%というように男女共に約半数ずつの割合となっている。また、学年については、1 年生よりも 2 年生の方が若干【獲得群】の割合が増えるが、こちらも大きな差はない。1 年生の【獲得群】43.8%【未獲得群】56.2%に対し、2 年生は【獲得群】54.1%【未獲得群】45.9%となっている。

比較的差が生じているのは進路希望の有無についてである。卒業後どのような仕事につきたいか決まっている学生は、【獲得群】49.7%【未獲得群】50.3%というように約半数の割合でわかれている。しかし、卒業

表 1. 専門分野に関する知識・技能の獲得状況

とても身につけている	ある程度身につけている	あまり身につけていない	まったく身につけていない	合計
4.3	44.9	46.5	4.3	100.0(187)

注：表中の値は%。( ) 内は度数。表 2 も同様に表記。

表2. 基本的属性との関係

	獲得	未獲得	合計
男性	50.0	50.0	100.0(12)
女性	49.1	50.9	100.0(175)
1年	43.8	56.2	100.0(89)
2年	54.1	45.9	100.0(98)
進路希望有	49.7	50.3	100.0(153)
進路希望無	16.7	83.3	100.0(12)

注：\*\*は $P < 0.001$ 、\*は $P < 0.01$ 。以下、同様に表記。

後につきたい仕事が決まっていない学生は、【獲得群】16.7%【未獲得群】83.3%というように【未獲得群】が圧倒的に多くなっていた。将来つきたい仕事を決めていない学生にとっては、なにを自分の専門と考えてよいのか不明確であり、専門的知識・技能の獲得に注意を払う段階にまでできていない様子が見えてくる。

### 3 - 3 高校時代の日常生活との関係

次は、少し時間をさかのぼって検討したい。表3は、高校時代の日常生活について、【獲得群】【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。なお、回答は、全くあてはまらない(=1)からとてもあてはまる(=5)までの5段階が用意されており、値が高いほど該当していることを表している。

この結果からは、専門的知識・技能が身につけている学生の方が、活動的に高校時代を過ごしていたことがわかる。学習や友人関係、部活動やボランティア活動について、【獲得群】の学生の方が積極的だという結果が得られている。具体的にみてみよう。

まず、学習についてであるが、普段の授業での予習・

復習はもちろんのこと受験勉強や資格取得についても【獲得群】の学生の方が熱心に取り組んでいた。「学校の勉強の予習・復習をよくした」「先生によく質問をした」「志望校に合格するためによく受験勉強をした」「資格試験のためによく勉強をした」のいずれの項目についても、【未獲得群】より【獲得群】の値の方が高くなっている。

また、【獲得群】の学生は、学習だけでなく友人との交際にも積極的である。「放課後や休日を友人とすごすことが多かった」「いつも一緒に行動する友人がいた」の項目についても、【未獲得群】より【獲得群】の値の方が高い。

さらに、部活動やボランティアといった授業外での活動についても、【未獲得群】より【獲得群】の学生が取り組む傾向にあるようだ。「部活動に熱心に取り組んだ」「ボランティア活動をよくした」の項目も、【未獲得群】より【獲得群】の値の方が高くなっていた。

【高校時代の日常生活】の検討からは、学習や友人関係、部活動やボランティア活動について、【獲得群】

表3. 高校時代の日常生活との関係

	獲得	未獲得	
学校の勉強の予習・復習をよくした	2.66	2.38	
先生によく質問をした	2.97	2.92	
志望校に合格するためによく受験勉強をした	3.41	2.94	*
資格試験のためによく勉強をした	3.14	2.93	
放課後や休日を友人とすごすことが多かった	4.09	3.86	
いつも一緒に行動する友人がいた	4.79	4.42	**
部活動に熱心に取り組んだ	3.80	3.62	
ボランティア活動をよくした	3.00	2.80	

注：表中の値は平均値。以下、同様に表記。

の学生の方が積極的だという結果が得られた。しかし、忘れてはならないのは、有意な結果が得られたのが、「志望校に合格するためによく受験勉強をした」と「いつも一緒に行動する友人がいた」の二つの項目のみだということである。高校時代については、受験勉強と一緒に行動する友だちの有無についてのみ【獲得群】と【未獲得群】の差があるといえる。

### 3-4 大学における日常生活との関係

【高校時代の日常生活】からは、【獲得群】の学生の方が、学習や友人関係、部活動やボランティア活動を積極的に行う傾向がみられた。こうした傾向は、大学生活においてもみられるのか、続けてみてみよう。

表4は、大学における日常生活について【獲得群】【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。なお、回答は、全くあてはまらない（=1）からとてもあてはまる（=5）までの5段階が用意されており、値が高いほど該当していることを表している。

この結果からは、専門的知識・技能が身につけている学生の方が、大学に入ってから学習や友人との交際に積極的に取り組んでいることがわかる。学習については、「図書館をよく利用する」「専門書をよく読む」「資格を取得するための勉強をよくする」の項目について、【未獲得群】より【獲得群】の値が高くなっていた。【獲得群】の学生の方が、日常的に学習する環境に身を置いていることがうかがえる。

また、友人との交際については、「大学ではいつも友人と一緒にいる」「大学の外で友人と遊ぶことが多い」の項目で、【獲得群】の値が【未獲得群】より高くなっていた。さらに、友人との交際ばかりでない。「親やきょうだいなど家族とよく会話をする」という親やきょうだいとの関係を聞いた項目についても、【獲得群】は【未獲得群】より高い値を示していた。【獲得群】の学生は、友人はもちろんのこと親やきょうだいとの関係も良好なようだ。

このように、【獲得群】の学生は、学習に積極的に取り組むばかりでなく、友人や親やきょうだいとの関係も良好である。そうした充実した状態が反映されているのだろう。【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも悩みを持っている割合が小さい。「友人のことで悩みがある」「大学をやめたいと思うことがある」「自分のやりたいことがみつからない」の項目については、【未獲得群】より【獲得群】の方が値が小さくなっていた。

【大学における日常生活】の検討からは、【獲得群】の学生の方が【未獲得群】の学生よりも、学習や友人との交際において活動的な様子が見えがえた。しかし、これらの傾向についても全て差があるといえるわけではない。有意な結果が得られたのは、「資格を取得するための勉強をよくする」「親やきょうだいなど家族とよく会話をする」「大学をやめたいと思うことがある」「自分のやりたいことがみつからない」のみである。ここでは、大学をやめたいや自分のやりたいことがわから

表4. 大学における日常生活との関係

	獲得	未獲得	
図書館をよく利用する	3.33	3.24	
専門書をよく読む	2.51	2.33	
資格を取得するための勉強をよくする	2.74	2.29	*
大学ではいつも友人と一緒にいる	4.77	4.58	
大学の外で友人と遊ぶことが多い	4.21	4.00	
親やきょうだいなど家族とよく会話をする	4.29	3.85	*
友人のことで悩みがある	2.79	3.15	*
大学をやめたいと思うことがある	2.20	2.80	*
自分のやりたいことがみつからない	1.79	2.51	**

表5. 授業態度・意識との関係

	獲得	未獲得
授業はできるだけ休まないようにしている	4.16	4.07
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	3.83	3.51
自分の成績は良い方だと思う	2.82	2.62
授業中に私語をすることが多い	2.79	2.92
授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い	2.83	2.85
授業中によく居眠りをする	3.15	3.56
大学の授業では幅広い知識を得られると思う	3.96	3.61
大学の授業では専門的知識を得られると思う	4.34	4.21
授業で考え方が変化したことがある	4.05	3.77

\*\*

ないという悩みの項目が二つ挙げられているのが特徴的だ。大学に適応していない学生は、専門性の獲得に励むという状態ではないと推察される。

### 3-5 授業態度・意識との関係

【高校時代の日常生活】、【大学における日常生活】の検討からは、受験勉強や資格取得のための勉強といった学習について、【獲得群】と【未獲得群】との差がみられた。では、学習の中でも、特に授業に対してはどのような違いがみられたのだろうか、続けてみていこう。

表5は、授業態度・意識について【獲得群】【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。なお、回答は、全くあてはまらない(=1)からとてもあてはまる(=5)までの5段階が用意されており、値が高いほど該当していることを表している。

この結果からは、【未獲得群】の学生よりも【獲得群】の学生の方がまじめに授業に取り組んでいる様子がうかがえる。「授業はできるだけ休まないようにしている」「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」「自分の成績は良い方だと思う」のいずれの項目についても、【獲得群】は【未獲得群】より高い値を示していた。

そのようにまじめに授業に取り組んでいることを表しているのだろう、【獲得群】の学生は授業中に他のこ

とをする傾向が小さい。「授業中に私語をすることが多い」「授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い」「授業中によく居眠りをする」の項目は、【獲得群】より【未獲得群】の方の値が高くなっていた。

また、【獲得群】の学生は、授業をまじめに聞くばかりでなく、授業に対して肯定的な意見をもつ傾向にある。「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」「大学の授業では専門的知識を得られると思う」「授業で考え方が変化したことがある」については、【獲得群】は【未獲得群】より高い値を示していた。

【授業態度・意識】の検討からは、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生より授業にまじめに取り組み、肯定的な評価をしている様子がうかがえた。しかし、これらの項目の中で、有意な結果が得られたのは、「自分の成績は良い方だと思う」についてのみである。授業への取り組み方よりは、実際の成績において、専門性の有無の差が明確に表れるということができよう。

### 3-6 教員に対する評価との関係

【授業態度・意識】の検討からは、【獲得群】の学生が授業を肯定的に評価する傾向にあることがうかがえた。こうした高評価は、授業だけでなく授業を行う教員に対してもみられた。続けて、【教員に対する評価】をみてみたい。

表6. 教員に対する評価との関係

	獲得	未獲得	
高度な研究能力をもつ教員	2.92	2.80	
専門分野の幅広い知識をもつ教員	3.21	3.02	
専門を超えた幅広い知識・教養をもつ教員	2.90	2.73	
わかりやすい授業を行う教員	2.74	2.51	
学生の意欲を引き出す教員	2.66	2.20	**
学生の立場になって考える教員	2.72	2.34	**

表6は、教員に対する評価について【獲得群】【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。なお、回答は、とても少ない(=1)からとても多い(=4)までの4段階でたずねている。

この結果からは、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも、教員に対する評価が高いことがわかる。具体的にみてみよう。まず、【獲得群】の学生は、研究ができ、知識がある教員が多いと考える傾向にある。

「高度な研究能力をもつ教員」「専門分野の幅広い知識をもつ教員」については、【未獲得群】よりも【獲得群】の値が高くなっていた。また、それだけではない。「専門を超えた幅広い知識・教養をもつ教員」といった教養の部分についても【獲得群】の学生は高く評価していた。【獲得群】の学生たちが、専門的知識はもちろんのこと幅広い教養も持つ、バランスのとれた教員に囲まれていると考えていることがわかる。

さらに、【獲得群】の学生は、学生の立場を理解する教員も多いと認識しているようだ。「わかりやすい授業を行う教員」「学生の意欲を引き出す教員」「学生の立場になって考える教員」の項目についても、【獲得群】は【未獲得群】より値が高くなっていた。

【教員に対する評価】の検討からは、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも、教員に対する評価が高い傾向にあることがうかがえた。しかし、これらの項目についても、全て有意な結果が得られたわけではない。有意な結果が得られたのは、「学生の意欲を引き出す教員」「学生の立場になって考える教員」のみである。専門性を獲得している学生は、先述の通り大学に適応している。教員についても、距離が近く、よき理解者として認識しやすいと考えられる。そのため、単なる教員の知識に対する評価ではなくて、自分の立場になってくれるかどうかという点において、専門性を獲得していない学生との差が明確に表れたのではなかろうか。

### 3 - 7 大学に対する評価との関係

【教員に対する評価】からは、【獲得群】の学生の方が、自大学の教員を高く評価していることがうかがえた。こうした高い評価は教員以外に対しても向けられたのだろうか。続けてみていこう。

表7は、大学に対する評価について、【獲得群】【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。回答は、とても不満(=1)からとても満足

表7. 大学に対する評価との関係

	獲得	未獲得	
自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム	3.16	2.85	**
自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム	3.17	2.84	**
資格取得のための支援	3.15	2.91	
就職活動のための支援	3.06	2.77	*
補習など学習のための支援	2.76	2.59	
大学の図書館の充実	2.91	2.86	

表8. 身につけた能力との関係

	獲得	未獲得	
文章を読んで理解する力	2.60	2.31	*
文章で事実や自分の考えを説明する力	2.46	2.15	*
プレゼンテーションの能力	2.22	1.95	*
幅広い知識	2.40	1.87	**
自分の将来の方向を考えること	2.95	2.58	**
自分に自信を持つこと	2.64	1.87	**
倫理観を養うこと	2.25	1.90	**

(=4) までの4段階でたずねている。

この結果からは、【獲得群】の学生は大学に対しても高く評価していることがわかる。「自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム」「自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム」といった授業・カリキュラムについて、「資格取得のための支援」「就職活動のための支援」といった就職対策について、そして「補習など学習のための支援」「大学の図書館の充実」といった学習環境について、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも高い値を示している。

しかし、これらの項目についても全て有意な結果は得られていない。ここでは、「自分の関心のある専門分野が学べる授業やカリキュラム」「自分の教養を広めることができる授業やカリキュラム」「就職活動のための支援」についてのみ有意な結果が得られた。

ここで、授業・カリキュラムに対する評価に有意な差が見られたことは興味深い。なぜなら、調査対象者たちはほぼ同じ授業を受講しているからである。同じ授業に対し、専門性を獲得している学生は満足し、専門性を獲得していない学生は満足しない。おそらくそれは、新しい知識を既に身につけている専門的知識に結び付けて理解できる学生がいる一方、これまで専門的知識を十分に身につけておらず、新しい内容を知ってもそれと既存の知識との関係がよくわからない学生がいるということを示しているのだろう。同じ授業を受けても、聞く側に知識がなければ、それを興味深いと位置づけることができない。学習者の二極化が進んでいると推察される。

### 3 - 8 身につけた能力との関係

【大学に対する評価】からは、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも自大学のことを高く評価していることが確認された。こうした評価の高さは自分の能力に対してもみられたのだろうか。最後に、【身につけた能力】についてみてみよう。

表8は、学生がこれまでに身につけたと考える能力について、【獲得群】と【未獲得群】の平均値の差の検定を行った結果を示したものである。回答は、まったく身につけていない(=1)からとても身につけている(=4)までの4段階でたずねている。

この結果からは、専門的知識・技能が身につけている学生は、同様に他の能力・技能も身につけていることがわかる。「文章を読んで理解する力」「文章で事実や自分の考えを説明する力」「プレゼンテーションの能力」といった文書の読み書きやプレゼンテーション能力について、【獲得群】の学生は【未獲得群】の学生よりも身につけていると評価する傾向にあった。

また、それだけではない。幅広い知識や将来展望、自分に自信を持つことや倫理観についても【獲得群】の学生の自己評価は高い。「幅広い知識」「自分の将来の方向を考えること」「自分に自信を持つこと」「倫理観を養うこと」の項目についても【獲得群】の値は【未獲得群】の値を上回っていた。なお、これらの項目については、いずれも有意な差が生じている。専門的知識・技能が身につけている学生は、身につけていない学生に比べ、他の能力・技能も身につけていることがわかる。

#### 4 おわりに

以上、本稿では、【基本的属性】、【高校時代の日常生活】、【大学における日常生活】、【授業態度・意識】、【教員に対する評価】、【大学に対する評価】、【身につけた能力】という七つの点から、専門的知識・技能を身につけている学生と身につけていない学生との違いについて検討してきた。そこから得られた知見は以下の六点である。

- ①専門的知識・技能を身につけている学生の方が、高校時代に受験勉強に熱心に取り組み、友だちと一緒に行動する傾向にある。
- ②専門的知識・技能を身につけている学生の方が、資格を取得するための勉強をし、親きょうだいと良好な関係を築き、大学に適応する傾向にある。
- ③専門的知識・技能を身につけている学生の方が、成績が良い傾向にある。
- ④専門的知識・技能を身につけている学生の方が、学生の意欲を引き出す教員や学生の立場になって考える教員が多いと考える傾向にある。
- ⑤専門的知識・技能を身につけている学生の方が、専門分野が学べる授業、教養を広めることができる授業、及び就職活動のための大学の支援に満足する傾向にある。
- ⑥専門的知識・技能が身につけている学生の方が、文書の読み書きやプレゼンテーション能力などの他の能力・技能も身につけていると評価する傾向にある。

こうした結果に鑑みると、専門性を身につけている学生は、身につけていない学生に比べ、学習レディネスがあり、友だちや親きょうだいと良好な関係を築き、自分の能力や周囲の学習環境等を肯定的に評価していることがわかる。すなわち、教員から見て何の心配もない、“理想的”な大学生活を送っている学生ほど、専門性を身につけているといえそうだ。

その一方、専門性を身につけていない学生はそれとは対照的な学生である。学習レディネスがなく、友だ

ちや親きょうだいと良好な関係を築いていない。また、そればかりでなく、自分の能力や周囲の学習環境等を肯定的にみることができない。

こうした差の多くは、大学外での生活あるいは大学入学以前に形成されており、大学の対応だけで一朝一夕に変化するわけではない。だが、そうした状況を考慮した上で、保育者養成課程に何ができるのか考えれば、大きく次の二点にまとめることができるだろう。

一つは、自ら学習する態度の育成である。専門性を身につけている学生は、高校時代に受験勉強に熱心に取り組み、大学時代に資格を取得するための勉強をし、成績がよい傾向にある。すなわち、学習に対する親和性の高い学生ほど、専門性を身につけているという結果が得られている。そうであるならば、自ら学習する態度を身につけさせることが重要になるのではなかろうか。なお、その際には、専門的知識・技術を扱った内容に限定する必要はないだろう。例えば、高校時代の学習内容の補習や、初年次教育の内容、大学における教養科目でもよい。集中して自ら課題に取り組むことができるよう、育てていくことが必要になる。

またもう一つは、友人や教員と出会うためのしかけの導入である。専門性を身につけていない学生は、高校時代に友人と一緒に行動しておらず、大学に適応していない。加えて、学生の意欲を引き出す教員や学生の立場になって考える教員が少ないと考える傾向にあった。そうであるならば、友人をつくり、教員と知り合い、大学を自分の居場所にする必要があるのではなかろうか。近年、多くの大学において、入学時のオリエンテーションイベントや少人数のゼミといった、入学したばかりの1年生を大学に適応させるための取り組みが行われている。そうしたしかけを積極的に導入することによって、学生が学習に集中できる環境をつくることも重要になると考えられる。

以上、本稿では、保育者養成課程に通う学生を対象としたアンケート調査の結果から、保育者養成課程における専門性の育成について検討してきた。しかし、



本稿は、一大学のみを検討に留まっている。今後、他大学でもアンケート調査を実施し、さらに詳細な分析を進める必要があるだろう。その点については、今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究は、「大学生の学習経験・生活に関する調査」(研究代表者=有本章)をもとに分析を行った。比治山大学高等教育研究所長(現・くらしき作陽大学学長)の有本章先生をはじめ研究協力者の先生方に心より感謝申し上げます。

## [註]

註 1 本稿では、幼稚園教諭及び保育士を「保育者」として表現する。

## [引用・参考文献]

- 1)文部科学省；幼稚園教員の資質向上について，2002  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm) (最終アクセス日 2011/11/2)
- 2)目白大学短期大学部 (研究代表者 佐藤弘毅)；短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究成果報告書 (文部科学省平成 21-22 年度先導的大学改革推進委託事業)，2011  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/itaku/1307546.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1307546.htm) (最終アクセス日 2011/11/2)
- 3)山田礼子編；大学教育を科学する，東信堂，2009
- 4)谷川夏実；保育者養成課程における学生の専門職意識の変化に関する要因分析，大妻女子大学家政系研究紀要，第 46 号：179-182，2010
- 5)奥山順子・山名裕子；求められる保育者の専門性と大学における保育者養成，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 28 号：119-132，2006

## **The Issues in Training Course for Kindergarten and Nursery School Teachers — Focus on the Ensuring Professionalism —**

Kayo NISHIMOTO Katsuyo KUNIHIRO

Abstract :

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology; has identified, the professionalism for kindergarten teachers. Recently, the need for ensuring professionalism in training course for kindergarten and nursery school teachers has been highlighted. However, there has been no research on the students in training course for kindergarten and nursery school teachers, who have not learned professionalism. Then, this paper analyzed the students who have not learned professionalism based on the results of the questionnaire surveys. The results show that the students who adjust to universities learn professionalism.